ドイツ文学研究史

Rainer Rosenberg, *Literaturwissenschaftliche Germanistik. Zur Geschichte ihrer Probleme und Begriffe*, Akademie-Verlag Berlin, 1989

ライナー・ローゼンベルク著
林睦實訳

大月書店

ドイツ文学研究史

Rainer Rosenberg: *Literaturwissenschaftliche Germanistik. Zur Geschichte ihrer Probleme und Begriffe*, Akademie-Verlag Berlin, 1980

江苏工业学院图书馆
藏书章

大月書店

はやし むつみ
林 睦實

1934年生まれ.
大阪大学大学院文学研究科博士課程修了.
1972年，学位論文 „Poesie und Politik - Entwicklungsetappen und Zentralprobleme des politischen Gedichts im Schaffen Heinrich Heines bis 1848" をライプツィヒ大学ドイツ文学史研究所に提出，文学博士号を授与される.
現在，早稲田大学第一文学部教授.
主要論文
「ハイネにおけるドイツ・ロマン派の革新」(朝日出版社)，「『トルクヴァート・タッソー』におけるゲーテの危機と変遷」(早大文研紀要)，「パラダイムの転換？——東ドイツにおける古典主義論争と受容美学批判の意味」(郁文堂)，„Zur Geschichte und Gegenwart der Germanistik in Japan" (Aufbau-Verlag) その他.

ドイツ文学研究史

1991年9月19日　第1刷発行

定価はカバーに表示してあります

訳　者© 林　睦　實

発行者　平　智　享

〒113　東京都文京区本郷2-11-9

発行所　株式会社　大　月　書　店

印刷 理想社
製本 関山製本

電話(営業)3813-4651(編集)3814-2931　振替　東京3-16387

Printed in Japan

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製(コピー)することは法律で認められた場合を除き，著作者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください

ISBN 4-272-60028-1　C3098

凡　例

一、本書は、Rainer Rosenberg, *Literaturwissenschaftliche Germanistik. Zur Geschichte ihrer Probleme und Begriffe*, Akademie-Verlag Berlin 1989 のうち、その最終章 Die Literatur der Arbeiterbewegung als Forschungsgegenstand der Literaturwissenschaft を除いて全訳し、それに未公刊の論文 Zur Geschichte der Literaturwissenschaft in der DDR を補論として追加したものである。

一、本書末尾に付した索引のうち、文献にかんする部分は原書にはないが、日本語版読者の便宜のために作成したものである。

一、原書の注は通し番号で付されているが、本訳書では、各章ごとに新たに番号（1）から起こした。

一、本訳書における括弧類の使用法は以下の通りである。

（　）――原著者によるもの。

［　］――原著者が引用文中に補足のために加えたもの。

〈　〉――引用文中の引用符（二重引用）。

〔　〕――訳者による補足。

「　」――引用、論文表題等。

『　』――著書名、新聞・雑誌等の表題。

ドイツ文学研究史 ■ 目　次

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

序　言　3

第一章　文芸学の自己理解　7

第一節　国民的フィロロジーの状況と学者の社会的威信　7

第二節　ゲルマン学者と作家。文芸学と同時代の文学との関係　22

第三節　大学のゲルマン学と文学理論的思考の展開　30

第二章　文学史記述における文学の概念　61

第一節　ヴォルフガング・メンツェルとローベルト・プルッツ　61

第二節　価値カテゴリーによる文学概念の再構築と通俗文学の線引き　81

第三節　文学の歴史か詩文芸の歴史か？　92
二〇世紀前半の文学理論的思考における文学と詩文芸の対立とそれの内包するイデオロギー的意味

第三章　ドイツ古典主義とロマン主義。カノンの形成　103

第一節　青年ドイツ派の「芸術時代」批判　103
「純粋」文学批評、対案としての文学史的ディスクルスの始まり

第二節　大学の文学史記述論争におけるカノンの形成　121
ゲルヴィーヌス、ヘットナー、シェーラー、R・M・マイアー

第三節　ドイツ精神史による古典主義の見方　168
ディルタイ

第四章　時代区分。様式　201

第一節　文学史記述の歴史における時代区分の問題　201

第二節　様式概念の広がり。様式による時代区分？　231

第五章　国民文学と世界文学　253

第一節　フィロロジーのアンビバレントな発端と文芸学　253

ヤーコプ・グリムのゲルマン学的構想の意義

第二節　ゲルマン学と比較文学研究　264

比較文芸学の確立過程における成果の先取りと困難

補論　東ドイツ文芸学の歴史について　301

訳者あとがき　323

注解　*1*

索引　*32*

ドイツ文学研究史

序　言

本書に収められた論文は、一九八一年に出版された前著『ドイツ文学研究史一〇章――文学史記述』と、ほぼ同じ時代を対象にしている。そこでは、およそ一八三〇年から二〇世紀初めの数十年代にいたる文芸学的ゲルマン学〔Germanistik〕を、主としてイデオロギー、研究機関、方法などの歴史の視点から論じたが、本書では、本質的に問題と概念の歴史を論述の視点にすえている。文芸学的ゲルマン学の歴史をいくつかの断面に輪切りにして、この学の成立と体系化、対象領域の記述をめぐる中心的問題がどのようにとりあげられ、そしてまた、研究の社会的機能について、この学がこれまでどのような自己理解をもって活動してきたか、といった論点をもとに究明をおこなう。このような切りこみ方は、学問史にたいする今日の関心が、多くの場合、問題と概念の歴史にむけられているのに、これらの問題の大部分の発展をいまなお脈絡のある形で記述したものがなく、そうした事実を考慮にいれた結果にほかならない。

文学の概念と文学の評価、さらには文学史の時代区分、国民文学と世界文学の関係、あるいはブルジョア文学と社会主義文学の関係――つまり、本書の各論文のテーマであるが――、それらが文学史記述の中心問題に属していることについて、まず異論はほとんどないはずである。であれば次に、文学の概念がどのように変化し、さまざまな時代に、どのような文学ジャンルの作品が書かれ、どのようにして

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

それらが序列を形成し、そして文芸学の方法が文学的プロセスとどのような関係にあるのか、といった問題を解明しなければならない。淘汰のプロセスについても、いかにこれを再構成するかが問題となる。このプロセスでは、かぎられた一群の文学作品が大量の伝承作品のなかからとりだされ、それらに美的価値が付与されるが、その美的価値には、さまざまの――道徳的、宗教的、政治的、社会的――価値基準が内包されている。そこで問題となるのは、そのときどきにどのような価値が文学遺産に求められ、文芸学的ゲルマン学がどのような価値序列をつくりだし、しかもそれがどのような社会的機能のなかで、どのような機能理解からおこなわれたのか、といった点である。これには、ドイツ古典主義観の成立やロマン主義受容の歴史――いわば、いつの時代にあっても、そのとりあげ方次第によっては文芸学的ゲルマン学の特徴があらわになる対立の歴史が、とくに興味をそそる問題であることは明らかである。似たようなことは、時代区分の問題――すなわち、時代の順列をどう組みたてるか、対象を構築する規定としてなにから出発するのか、どのような歴史哲学的見解がその根底にあるのか、などという問題についてもあてはまる。その際に看過しえないのは、様式概念を文芸学へ導入したことの意味である。そしてまた、文学史記述は世界史から国民史へコンセプトを移行させた後に、世界文学的地平にむかって、どこまでひらいた姿勢をとり続けられたのか、その点を問題にしなければならない。これに関連して解明を必要とする問題は、ゲルマン学が比較文芸学のコンセプトにむけてどのように対応したのか――具体的には、比較文芸学がなぜドイツで発展できなかったのか、という問題である。結局のところ、文芸学それ自身のディスクルス〔エッセイ風の論議による思想的伝達の形式〕は、どうやら歴史的に考察するしかない。議論の対象になっているのは、文学史の叙述の変化である。文芸学的ゲルマン学の言語と

「スタイル」は、一九世紀末から二〇世紀にかけての批評家、哲学者、作家たちがそのエッセイで披露したような、対案としての文学史的ディスクルスと突きあわせて検討せねばなるまい。

いうまでもなく、こうして列挙した論点のほかに、学問史にとっては同じく重要な他の問題をさらにつけ加えることもできよう。しかし、本書の論文が、はじめに指摘したような諸問題の歴史的発展を包括的に叙述した、と主張する気はさらさらない。もとよりそれは、文学史記述の一般的諸問題にかかわる事柄であり、その発展はフィロロジー〔Philologie――文献学、とくに文学語学研究をさす〕の一分野の歴史にかぎられているわけではないが、ここではその一分野にかぎって、個別的に論じているにすぎない。その意味で、本書は、せいぜい文芸学上の問題と概念の一般史にたいして、なにほどかの貢献をしているかもしれない。もっとも、これは本書の願うところでもあるが、なにしろ本書自身に課せられた制約――つまり、ゲルマン学の歴史に限定するという制約――のもとでは、いくつかのかぎられた論点へのアプローチしか提示することができない。もちろん、それらの接点は、偶然に選んだわけではない。先に述べた時代的枠組みのなかで、諸問題の歴史は各問題の「焦眉の」局面に集中し、転換点を明示している。時代的枠組みが破られるのは、本書がたびたび現在の討論と認識のレベルにも明確に言及し、そして筆者も自分なりの見解を討論の対象とする場合にかぎられている。いくつかの論述は、とりあえず今日の問題状況の記述から出発している。やがてその後で、なぜそうした問題状況が生じたのか、その理由を歴史に問いかけるためである。このように、学問史を現代の歴史的次元の争点として記述するようにつとめることで、筆者は、焦点のまっただなかにある文学理論上の論争に、もてるかぎりの歴史的知識を最大限に役立てたいと願っている。

第一章　文芸学の自己理解

第一節　国民的フィロロジーの状況と学者の社会的威信

いまの時代は、文学研究者の卵であっても、研究の意味と目的はなにかという問いかけになじむのがはやい。ありあわせの返事が質問者の気持ちをたいてい満足させはしないことも、かれらには早々にわかってしまう。それに妥協する者もいれば、無用の長物ではないかという疑惑の目にはそしらぬふりを決めこむか、それともひらきなおって、人さまに寄生する身の上だと自認する連中も少なくない。それ以外は、なんとかして身の証をたてなければ、という重苦しい感情にたえずとり憑かれている。それは、かれらの物腰から読みとれる。

今日、質問を投げかけるのは、文学の素人とか美学の素養がない人たちだけでなく、ぜんぜん悪意からではないが、文芸に通暁している読者であったり、ときには挑発的やり方ながら、作家、演出家、その他の芸術的制作と表現にたずさわる人たちである。一人前の研究者なら、何世代もの学者たちが自分の仕事について真剣に内省しながらつくりあげてきた数多くの解答例を、虎の巻のように使うこともあろう。その解答例一覧には、実際にだれの目にも明らかな高い次元の社会的利益に仕えるものこそ文学

の学問的研究である、とするおびただしい数の論拠が含まれていて、そのために、文学のような文化現象がただ存在するだけでは、それを学問的に研究するだけの、まだ十分な根拠にはならないという人たちにさえ、文学の学問的研究は正当なものとして映らざるをえない。

にもかかわらず、文芸学の意味と効用への疑問が消えさらないのは、なにもこの高い次元の利益が無視されているわけでもあるまい。むしろ、文芸学は身の証をたてるべく設定したみずからの機能を、本当に果たしているのかどうか、そのような疑念がいつもつきまとっているからであろう。文芸学の歴史研究への貢献もあまりにも乏しい、という非難を耳にする。その理由は、文芸学が選別方式をとり、過去の文学をその全体の広がりや、実際の作用関連のなかでもとらえきれず、そのために、たいていの文学史記述は文学と社会との現実のかかわりの歴史を素通りしてしまい、したがって文化史的総合の十分な手がかりも得られない、というのである。確かにいわれてみると、われわれは古い文学遺産からの偉大な発見と思われているもの、そしてまた、今日認められている昔の作品の新解釈とか再評価とかの恩恵を、文芸学に負ってきた経験はこれまでめったになく、むしろそれらは、文学そのものや同時代の演劇のおかげなのである。最近の、もっとも印象に残る実例の一つは、ロマン主義への関心の復活であり、これには文芸学がまるで不意を突かれてどぎまぎしたほどである。

そうであれば、たいていの文芸学者よりも文学や演劇の実作者のほうが、同時代の人間の気分や趣味を読みとれる繊細な感情を磨きあげ、それによって、昔の文学の現代への作用能力を学者以上にりっぱに認知できる立場にあることを、たぶん認めてもよさそうなものである。文芸学者にとってさらにつらいのは、作用能力については衆目の一致する作品をとりあげたときに、作家たちのほうがたびたびかれ

らを凌ぐ解釈者でもあるという反論である。いや、そればかりではない。文学の理論にかんしても、哲学とか心理学、あるいは言語学から受けとった理論的刺激をのぞけば、作家や批評家の思考上の試みのほうが、ここ数十年間は、しばしば大学での学問的普遍化に比べてずっと生産的であったともいわれる。

こうした非難は認めるしかない。それらは実際の状況をあらわしているからである。こうした非難にたいしては、もともと文芸学がほかでもなく、まさにこの状況から抜けだし、実際に有効な、社会的にも有用な学問になるべく、過去数十年間にわたって努力を重ねてきたのだと、指摘するのが関の山であろう。たとえばである。現代文学への関心は、文芸学者の間でも強くなってきたが、それにとどまらず、批評的視点から現代文学に介入し、新刊作品の評論を文芸学の社会的任務と考え、こうしたやり方で、作家との対話をふたたび始めようとつとめている者たちの数も、また増えてきた。さらにまた実例をあげれば、ポスト・モダニズムが文学的テキストのなかにディスクルスを融合させるよりもはるか以前に、公衆の面前に登場し、――大学で保証された身分でありながら――今世紀前半の制度化された学問の側からの偏狭な思いあがりのために、学問的認知をこばまれ続けてきた例の「文士」タイプへと、逆に近づいていった文芸学者のケースもある。現代の文学的プロセスへのこうした介入によって、文芸学者と作家との溝はこれまで一度も埋めることができなかったが、それと並んで、読書習慣や読者の期待をめぐる経験的、社会学的研究に着手して、文化・社会政策の両面で役立ちそうな成果をあげようと、継続的な試行にのりだしている。しかし、研究者の出版物が今日では全体として、かつての一時期に比べて広く普及しているなどと、統計的な証拠をみせられても、文芸学は、その存在理由を疑わせるほど決定的に威信を失っている以上、まるでその機能がなに一つ制限されなかったかのように思いこむわけには

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.